

# No. 3 名馬でたどる 千代田牧場 by 有吉正徳

## イチフジイサミ

父 オンリーフォアライフ 母 メニナ

1970-1993

2000ギニーのほかにキングエドワード7世S(現GⅡ)の勝ち鞍がある。代表産駒はイチフジイサミだが、そのほかではメイジタイガー(関屋記念、新潟記念)やクリイワイ(金杯=現中山金杯、アルゼンチンJCC=現アルゼンチン共和国杯)などがある。スタミナに恵まれた産駒が多く、長距離戦での活躍が目立った。母の父としても菊花賞馬ホリスキーや英GⅢの勝ち馬カンバラを送り出した。カンバラはトニーピンの父となった。凱旋門賞を制したトニーピンは日本で種牡馬になり、ジャングルポケット、ウイニングチケットという2頭の日本ダービー馬を生んだ。

現代のように、2歳の夏から距離2000mのレースが用意されているのと違い、かつての2歳戦は短距離戦が主流だった。イチフジイサミのようなステイヤーにとっては若い時期に真価を発揮しにくい競走体系である。1972年7月という早い時期に東京競馬場でデビューしたイチフジイサミだったが、12月までに10戦し、1勝も挙げることはできなかった。松永光雄調教師は少しでも条件の良いレースを選ぼうと、未勝利の身で距離1600mの特別レースに出走させたりしたが、結果にはつながらなかった。

待望の初勝利は3歳1月の東京競馬場だった。ダート1600m戦に臨み、2着に6馬身差をつける圧勝で初白星を挙げた。その後、アザレヤ賞(東京、ダート1600m)で3着、桜草特別(中山、芝1800m)で2着と1勝クラスが上がってからも上位争いを続けた。3月の中山でいずれも芝1800mのれんげ賞、菜の花賞を連勝し、皐月賞の出走権を獲得した。

4月15日の中山競馬場は雨。重馬場で行われた16頭立てのレースで、イチフジイサミは健闘した。10番人気という人気薄だったが、他馬が避けたインコースを果敢に攻め、最後の直線ではハイセイコーと先頭争いを演じ、4着に入った。

皐月賞からはダービーに直行した。ハイセイコーがダービーで3着に終わったことについて、強行ローテーションを敗因に挙げる説もあるが、筆者は距離適性だと考える。ハイセイコーが現役時代に勝った最長距離は宝塚記念の2200mであり、2200mを超えるレースでは7戦未勝利だった。2着のイチフジイサミはこれが

デビュー17戦目だった。NHK杯から中2週だったハイセイコーに比べ、イチフジイサミは皐月賞からの直行とダービー直前はレース間隔に余裕がある。けれどもデビュー11戦目だったハイセイコーに比べ、17戦目でダービーに臨んだイチフジイサミの方がはるかにローテーションは厳しかった。

体力と距離適性に恵まれたイチフジイサミだったが、あと少しの幸運が足りなかった。主戦だった郷原洋行騎手の負傷だ。イチフジイサミのデビュー4戦目から13戦連続して手綱を取ってきた郷原騎手がけがをしたためダービーでの騎乗ができなくなった。津田昭騎手も悪い騎手ではないが、初コンビがダービーというのはプラスにはならなかった。

27頭立ての15番枠からスタートしたイチフジイサミは中団を進んだ。スタートからの1000m通過が59秒6というハイペース。先行集団にいたハイセイコーの脚色は最後の直線で鈍る。その外から追い込んできたのがイチフジイサミだった。

しかし、さらにその外からタケホープが襲いかかる。残り200m付近で2頭のマッチレースになった。イチフジイサミの津田騎手が必死に追うが、タケホープの嶋田功騎手も応戦する。この時の内斜行で嶋田騎手は過怠金5千円の制裁を受けた。5千円は当時の過怠金の最高額。現在の降着制度ならば、どういう裁定が下されたかはわからない。

ダービーを戦い終えたイチフジイサミは1カ月後、日本短波賞(現ラジオNIKKEI賞)に出走する。中山競馬場の芝1800mで行われたレースで鞍上には郷原騎手が復帰した。1番人気に支持されたイチフジイサミは、ダービーで6着だったニューサントに半馬身差をつけて優勝。デビュー18戦目で待望の重賞制覇を果たし、秋に備えて夏の休養に入った。

3歳秋、セントライト記念は2着。菊花賞はタケホープ、ハイセイコーに続く3着。有馬記念はストロングエイトの11着と勝ち切れず、この年を終えた。

4歳時はオールカマーとオープン戦で1着となり12戦2勝。惜しかったのが11月の天皇賞・秋だ。インコースの最短距離を進んだ2番人気のイチフジイサミは最後の直線でじわりと伸びた。その外からカミノテシオが迫る。内に押し込められる形になったイチフジイサミはいったんポジションを下げて外に持ち出し、再度追い込み態勢に入るが、仕掛けが遅れた分、半馬身届かず2着に終わった。この時の内斜行でカミノテシオの加賀武見騎手は4万円の過怠金を受けている。ダービーといい、天皇賞といい、勝ち馬の斜行で不利を受けるのはいつもイチフジイサミだった。このまま勝負運に

恵まれず、現役生活を終えるのか。嫌な雰囲気吹き飛ばしたのが5歳春の天皇賞だった。

4歳シーズンを有馬記念(8着)で終えたイチフジイサミは3月の中山記念から5歳シーズンをスタートさせた。中山記念で4着になった後、ダイヤモンドSでは3着と徐々に調子を上げていった。年明け3戦目が天皇賞・春だった。イチフジイサミは2番人気に支持されたが、単勝票数でイチフジイサミの4倍以上も馬券が売れているキタノカチドキという大本命馬がいた。イチフジイサミの立場は挑戦者だった。

イチフジイサミの1つ年下のキタノカチドキはデビューから7連勝で皐月賞を制覇。ダービーは外枠が応え3着に終わったが、神戸新聞杯、京都新聞杯と連勝し、菊花賞にも勝った「幻の三冠馬」だ。マイラーズCで有馬記念を制したタニノチカラなどを相手に快勝して、天皇賞に臨んでいた。

2周目の最後の直線。レースはキタノカチドキとイチフジイサミのマッチレースになった。末脚勝負だ。この争いを制したのがイチフジイサミだった。ラップタイムを見ると、最後の2ハロンは11秒5-11秒8というタイムが計時されている。小雨のやや重馬場で行われた距離3200mのレースとしては相当に速い、上がり勝負になっている。イチフジイサミのステイヤーとしての能力が最大限に生かされたのが、この天皇賞だった。この時に着けていたゼッケンは15番。苦杯をなめたダービーも15番。因縁のゼッケンで千代田牧場に大レース初勝利をもたらした。

イチフジイサミに関して、飯田社長にもうひとつ面白い話を伺った。1975年11月の目黒記念・秋を最後に現役引退が決まり、イチフジイサミは種牡馬になることが決まった。この時、中山競馬場から北海道にイチフジイサミを運ぶ馬運車は「タケホープ号」だったというのだ。日本馬匹の馬運車にはダービー馬や名馬の名前がついている。それにしても、イチフジイサミを種牡馬として送り出す馬運車が、よりによって宿敵の名前が付いたものとは。北海道まで同乗した当時大学1年だった飯田社長もきっと苦笑いしていただろう。もちろん馬運車の中では一緒に好物の「ふじ」をほおぼったという。

◇

有吉正徳(ありよし・まさのり)1957年1月、福岡県出身。1982年、東京中日スポーツで競馬記者デビュー。1992年に朝日新聞に移る。ミスターシービー以降、コントレイルまで6頭の三冠馬取材。2022年に定年退職し、フリーの競馬ライターに。著書に「2133日間のオグリキャップ」「第5コーナー〜競馬トリビア集」。朝日新聞金曜夕刊「有吉正徳の競馬ウィークリー」は連載20年。週刊競馬ブックで「一筆啓上」、JBBAニュースで「第5コーナー」を執筆。